



JAPAN  
CULTURAL  
EXPO 2.0



文化庁  
Agency for Cultural Affairs,  
Government of Japan

令和6年度地域ゆかりの文化資産を活用した展覧会支援事業

# CHANGES IN ARMOR

令和6年度 秋季特別展

うつりゆく

よろい

かぶと

甲と由目

— 弥生から江戸へ —

《子ども向け》

解説リーフレット



左: 竖矧板鉄留衝角付冑・長方板革綴短甲・頭甲・冑甲(古墳時代)  
茶ずり山古墳(朝来市)朝来市教育委員会蔵 国指定重要文化財  
右: 緋威金小札二枚胴具足(六十二間筋兜付)(江戸時代)兵庫県立歴史博物館蔵



## 弥生時代

日本では今から約2,400年前(弥生時代の中頃)、ムラ同士の戦いが始まったと考えられています。弥生時代には、鉄を加工する技術は十分発達しておらず、よろいやかぶとは木や蔓、革などの身近で手に入り、加工が簡単な素材で作られました。この頃のはよろいには木を割り貫いたものや木の板を組み合わせたものなど、色々な形のはよろいが確認できます。



弥生時代の木の甲 南方遺跡(岡山県岡山市) 岡山市教育委員会蔵



組み合わせ式の木の甲を着た弥生時代の戦士 国立歴史民俗博物館蔵



割り貫き式の木の甲を着た弥生時代の戦士 大阪府立弥生文化博物館蔵

## 古墳時代①

古墳時代(約1,700年前~約1,300年前)になると、技術が発達し、鉄でできたよろいやかぶとが作られるようになりました。しかし、古墳時代の初め頃は、まだ鉄でできたものは非常に貴重で、特別に高い位にあった人のみを持つことができたようです。



古墳時代前期の鉄製甲冑 瓦谷1号墳(京都府木津川市) 木津川市教育委員会蔵

写真提供 公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



古墳時代中期の鉄製甲冑 茶すり山古墳(朝来市) 朝来市教育委員会蔵

## 古墳時代②

古墳時代中頃(約1,600年前)になると、鉄を加工する技術が発展し、非常に多くの甲冑が作られるようになります。ヤマト王権の中核であった大阪や奈良の周辺で生産されたよろいやかぶとは、東北地方から九州地方まで、各地を治めるリーダーに配られました。兵庫県内でも雲部車塚古墳(丹波篠山市)や茶すり山古墳(朝来市)などでは、多くのよろいやかぶとが見つかっており、当時の王権にとって「ひょうご」が重要な地域であったことがわかります。



古墳時代中期の鉄製甲冑 雲部車塚古墳(丹波篠山市) 京大考古学研究室保管



### こふんじだい 古墳時代③

弥生時代以来、日本では「短甲」と呼ばれるベスト状のよろいのよろいが作られていましたが、古墳時代の後半（約1,500年前）に小さな鉄板を紐で繋いだ「挂甲」と呼ばれるよろいが大陸から伝わります。小さな鉄板は小札と言ひ、それぞれの小札が動くように繋ぎ合わされることから、「挂甲」は「短甲」に比べて動きやすく、同時期に伝わった乗馬にも適していました。そのため、古墳時代の終わり頃（約1,500年前）には、「短甲」に代わり、日本のよろいの主流を占めるようになりました。



あすかじだい こふんじだい まつき へいし  
飛鳥時代（古墳時代末期）の兵士  
奈良文化財研究所 飛鳥資料館蔵



ならじだい けいこう こざね へいしやうきやうあと ならけんならし  
奈良時代の挂甲小札 平城宮跡（奈良県奈良市）  
奈良文化財研究所蔵



ふくげん ざいれいよう けいこう  
復元された儀礼用の挂甲 靖国神社遊就館蔵



へいあんじだい まつき くわがせ  
平安時代末期の鉄形  
ほうじやうじどのあと きやうとふきやうとし  
法住寺殿跡（京都府京都市）木下美術館蔵

### ならじだい へいあんじだい 奈良時代～平安時代

奈良時代（約1,300年前～約1,200年前）になると、古墳が作られなくなり、よろいやかぶとをそのままお墓に埋めることもなくなります。そのため、奈良時代のよろいで全身が残っているものはありませんが、当時の王宮跡などから鉄製の小札が出土しており、古墳時代から引き続き「挂甲」が使われていたと考えられています。

### へいあんじだい むろまちじだい 平安時代～室町時代①

平安時代の半ば（約1,100年前）になると、各地で争いが起こり、そのなかで武士と呼ばれる人々が現れました。彼らは、反乱の鎮圧や貴族の警護などを通じて力を蓄え、鎌倉時代（約850年前）以降、約700年間にわたり、日本の政治を動かす存在となりました。

戦うことを専門とした武士たちは、「挂甲」を更に進化させ、日本独自のよろいである「大鎧」を作り上げました。鉄や革で作られた小札を繋ぎ合わせて作られた「大鎧」は、馬に乗って弓を射ることに適した構造となっています。

また、「大鎧」に合わせる「星兜」は、古墳時代に使われた「衝角付冑」が変化したものと考えられています。

古墳時代から続く武装の伝統は、武士の世となり、形を変えつつも継承されていきました。



おおよろい 靖国神社遊就館蔵（原品：厳島神社蔵）



へいあんじだい まつき ほしかぶと  
平安時代末期の星兜 藍住町教育委員会蔵



## へいあんじだい むろまちじだい 平安時代～室町時代②

かきゆうぶし けらい 下級武士や家来たちは、「腹巻」や「胴丸」と呼ばれるよろいを着用しました。これらも「大鎧」と同じく、小札をつ  
ないで作られます。「大鎧」よりも簡単なつくりで防御性には劣りますが、軽量で徒歩での行動に適していました。

なんぼくちようじだい やく 南北朝時代（約700年前）に、馬に乗り、弓矢で戦うという伝統的な戦い方が廃れたことで、身分の高い武士たちも  
「大鎧」に比べて動きやすく、様々な戦い方に対応できた「腹巻」や「胴丸」を使うようになりました。



はらまき 腹巻 国立歴史民俗博物館蔵



どうまる 胴丸 三身山太山寺（神戸市）蔵（写真提供：大阪城天守閣）



どうまる はしたにじょうあと こうべし 胴丸 端谷城跡（神戸市） 神戸市蔵

## せんごくじだい あづちももやまじだい 戦国時代～安土桃山時代

むろまちじだい おわりころ 室町時代の終わり頃（550年前）になると、京都で起こった争いが、日本全国  
に広がりました。戦いに加わる人々の増加に伴い、これまで以上に多くの甲冑が  
必要とされました。そのため、たいりょうせいせん 大量生産に向けた構造をもつ「当世具足」と呼ば  
れる新しい甲冑が生み出されました。「当世具足」には激しくなる戦いに備え、  
すきま無く体をおおうことで、ぼうぎょせい 防御性を高めているという特徴があります。



こんいどすけおしおけがどうぐそく きんじゆうにけんすひかぶつづき 紺糸素懸威桶側胴具足（三十二間筋兜付） 兵庫県立歴史博物館蔵



## えどじだい 江戸時代

えどじだい はいり 江戸時代に入り、平和な時代が訪れると、甲冑が実際の戦いに使われること  
はなくなります。この時代には、甲冑は自身の家の伝統や強さを示す象徴的な  
役割を担うため、華やかな装飾が施されるようになりました。

触れる・体感する、考古学のワンダーランド。

兵庫県立考古博物館

Hyogo Prefectural Museum of Archaeology

〒675-0142 加古郡播磨町大中1-1-1

【電話】079-437-5589 【FAX】079-437-5599

【HP】<https://www.hyogo-koukohaku.jp/>

ひおとしきんこざねにまいどうぐそく ろくじゆうにけんすひかぶつづき 緋威金小札二枚胴具足（六十二間筋兜付） 兵庫県立歴史博物館蔵



06教©2-018A4